

「共和党大敗は米国政治の保守化潮流の転機となるか？」

米国保守層はどこに向かうのか？：掲載タイトル

11月7日に実施された米国連邦議会の選挙結果は、概ね直前の選挙予想通りだったが、下院ばかりでなく、五分五分と言われた上院でも民主党が多数派となり、文字通り民主党の大勝、共和党の大敗となった。連邦議会のみでなく、同時に行われた州知事選でも全米50州のうち、改選となった36州の州知事選中18州で民主党候補が当選、民主党は12年ぶりに全米過半数の州知事を獲得した。1994年に共和党が上下両院とも多数派となった「共和党革命」から12年が経ち、共和党の政治的な優位は終わりを迎えようとしているのだろうか？

今回の選挙での共和党大敗の最大の原因が、イラク問題での情勢の悪化、状況打開の展望が見えないまま米兵の死傷と莫大な財政的負担が継続していることへの有権者の苛立ちであることは報道されている通りである。ラムズフェルド国防長官の解任が共和党の大敗が確定した投票日翌日の8日に発表されたことは、そのことを象徴している。ただし、こうした判りやすい事情の背後で共和党にとってより懸念すべき支持者の間の亀裂が生じていることに目を向けておくべきだろう。

共和党を支える4大支持基盤の分裂

共和党の政治的な優位は、①保守的キリスト教徒（道徳的保守層）、②ビッグビジネス、③リバタリアン系保守層、④ネオコン系保守層という4つの異なった支持層を束ねることで実現していた。ところが本来、水と油ほど異質なこの4層の間の亀裂、共和党離れが進み、共和党への投票率が低下したことが今回の選挙で劇的に表面化した。

共和党のスキャンダルによるキリスト教保守派層の支持低下

共和党は選挙を控えた最悪のタイミングで重大なスキャンダル発覚に見舞われた。最大の打撃となったのは、フォーリー議員（共、フロリダ）が、議会で働く少年らに猥褻Eメールを送っていた事件が9月末に発覚したことである。同議員は事件発覚後直ちに辞職したが、事前に問題を知っていた共和党指導部による隠ぺい疑惑が浮上、共和党のイメージが一気に悪化した。

さらにフォーリー議員が、弁護士を通じて同性愛者であることを告白したという「ダメ押し」まで加わった。中絶や同性愛ばかりか、婚前交渉すら「非道徳」として拒否する米国の道徳的保守層にとって、共和党議員の起こしたこの問題は党への信頼を大

大きく揺るがし、投票を棄権する、あるいは反対候補に投票する動きにつながった。

### リバタリアン系保守層の共和党離れ

加えて見逃せないポイントがリバタリアン系保守層の共和党離れである。リバタリアンとは徹底した個人主義を基調とする米国の政治信条である。リバタリアン系保守層は、個人の自由を至上とし、それを保障するための「必要最小限の政府の存在」を支持する。彼らは徹底的な個人主義の立場から、対外的な戦争一般についても否定的であり、イラク戦争には元々批判的だった。この点で「民主化イデオロギー」のために対外的な軍事的関与を積極的に主張するネオコン系保守層とは全く異なる。また道徳的保守層が同性婚や中絶に強い拒否感を示し、法律で禁じるべきだと考えるのと反対に、リバタリアン系保守層は、そうした価値観、道徳の選択は個人の自由である故に政府は一切介入すべきではないと考える点で、道徳的保守層とも異なる。

減税や規制緩和などによって「小さい政府」を主張する共和党は、従来多くのリバタリアン系保守層の票を獲得してきた。しかしブッシュ政権の下では、リバタリアンの共和党離れが指摘されている。ワシントンのシンクタンク、ケイトー研究所のデイビッドボーズ氏とデイビッドカービー氏が10月に発表した報告書“The Libertarian Vote”によると、リバタリアンに分類される傾向を強く持つ有権者は有権者全体の9～14%程度である。ブッシュ大統領は2000年の大統領選挙では、リバタリアン系有権者の票の72%を獲得、民主党対立候補のアルゴア候補は20%の獲得に止まった。しかし2004年の大統領選挙ではブッシュ大統領の獲得したリバタリアン票は59%に減少、民主党候補のジョンケリー上院議員は38%を獲得したと分析されている。

ブッシュ政権の下でリバタリアン主義者の共和党に対する支持が減少した理由は同報告書によると、以下の4つの問題に対してリバタリアン系保守層が不満を強めたからである。

- ① 巨大な財政支出、赤字の継続
- ② 社会的寛容（同性愛者の結婚禁止、移民寛容政策など）
- ③ 市民権の侵害（対テロ戦争を巡る国家安全保障局のインターネット、電話盗聴）
- ④ イラク戦争（対外的武力行使）

保守とリベラルの両極化が進んだ米国の政治状況では、有権者全体の9～14%程度を占めるリバタリアン保守層は浮動票投票者として、選挙結果を左右するほどの大きな影響力を持ちうる。今回の選挙では、それが現実化したわけである。

### 変化の節目に直面する米国政治の潮流

さらに、移民法改革問題を巡って、ヒスパニック系住民が不法移民取締りに強硬な姿

勢を示す共和党の強硬派への反発から、民主党支持に傾斜したことも無視できない。本来、油と水ほど異なる4つの支持層を束ねることで成り立っていた共和党の政治的な優位は、道徳的保守層とリバタリアン系保守層の2大支持層が、共和党の重大な失点により、同党離れを起こしてしまったことで崩れてしまったと言える。しかし大勝した民主党にも、イラク問題や経済グローバル化が産み出す諸問題に対して一貫した新しいビジョンとリーダーシップがあるわけではない。今回の民主党の大勝が「敵の失敗」に大きく依存していることは民主党支持者も認めていることだ。2008年の大統領選挙に向けて、共和党が再び求心力を回復できるか、民主党が今回獲得した新しい有権者層の支持をつなぎとめることができるか、米国の政治トレンドが変化の大きな節目に直面していることは確かである。

以上